

デジタルで変わった大学図書館の役割

土屋俊

(千葉大学)

2005年11月10日

<http://cogsci.L.chiba-u.ac.jp/~tutiya/Talks/>

目次

1. 日本の大学図書館が置かれた現在の状況
2. 資料デジタル化がもたらす変化
 - i. 物品購入からライセンスへ
 - ii. 権利関係の変化
 - iii. 「コレクション」のベクトルの変化
 - iv. 分類・目録から検索支援・ナビゲーションへ
 - v. 「図書館間協力」の意味の変化
3. 日本の大学図書館は変化に対応できているか
 - I. 電子ジャーナル
 - II. 利用者教育
 - III. 電子資料の保存管理
 - IV. 出版者としての図書館

結論

- 大学図書館の役割が、教育活動の支援・研究活動の支援・社会への貢献・人類の知的遺産の継承への貢献であることに変化はない
- (その点で変化がないとすれば)「デジタル化」で変化するのは、その具体的実施方法にすぎない
- とはいえしかし、インターネットは偉大
 - ライセンシング
 - 管理・保存などへの影響
 - サービスの目的、方法への影響
 - そもそもの役割の変化(受け入れから発信へ)

背景：日本の大学の社会的役割の変化

- これまでは
 - 研究⇒研究者へ向けた論文執筆
 - 社会との接点は将来への人材養成
 - ⇒ いわゆる「象牙の塔 Ivory tower」(の批判)
- これからは
 - 社会の知識化・情報化
 - ⇒ 高等教育の社会的機能の拡大
 - ⇒ 研究成果の直接還元(知財とか産学連携も含む)
 - 知の継承(従来の役割)⇒(国境を越えた)人類的貢献

日本の大学図書館は日本の知的基盤

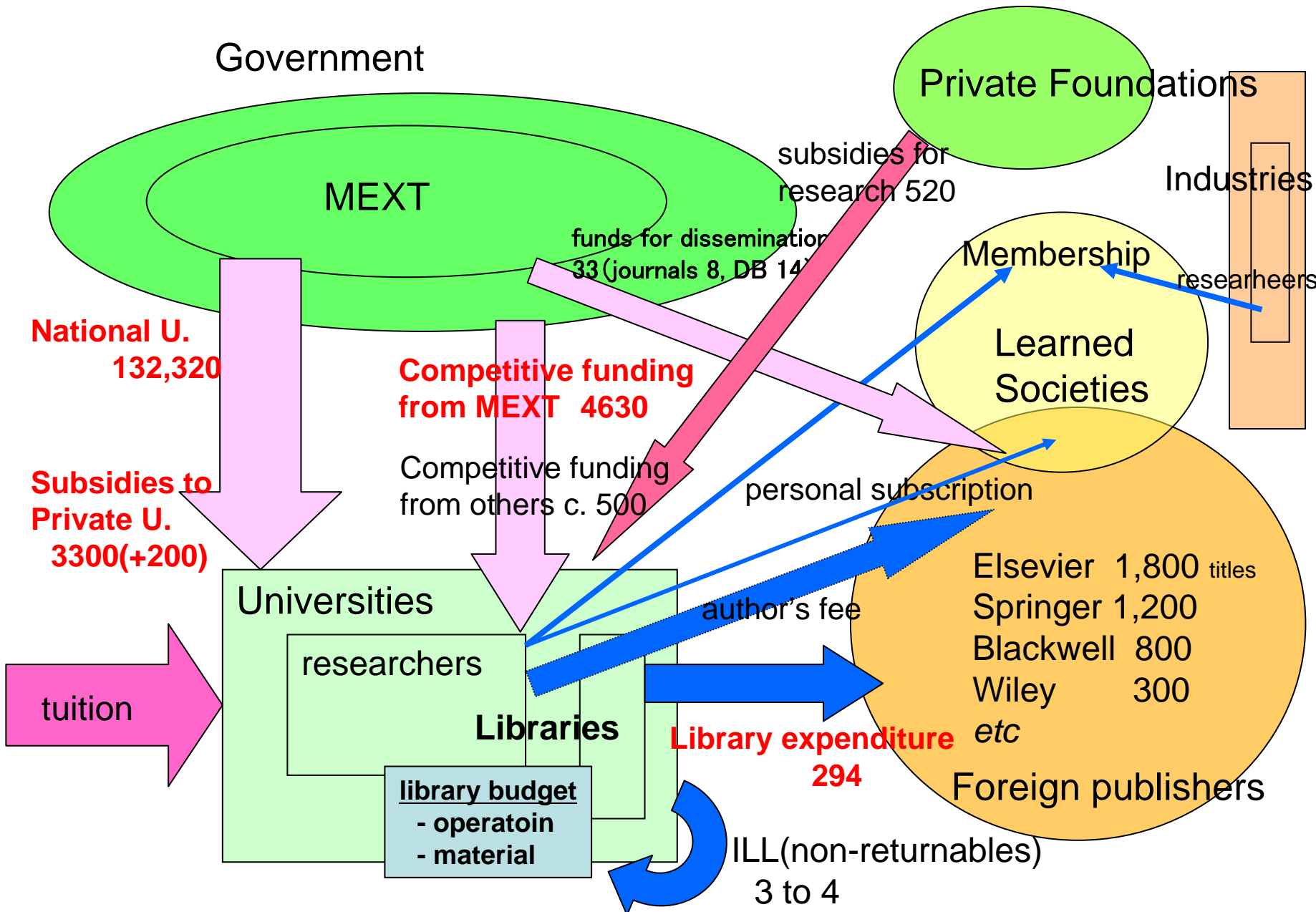
- 公共図書館の資料費：354億円
 - うち図書費： 277億円
- 大学図書館の資料費：771億円
 - うち図書費： 324億円
 - うち国内発行図書： 197億円
 - 雑誌： 357億円
 - うち外国雑誌： 296億円

(2003年)

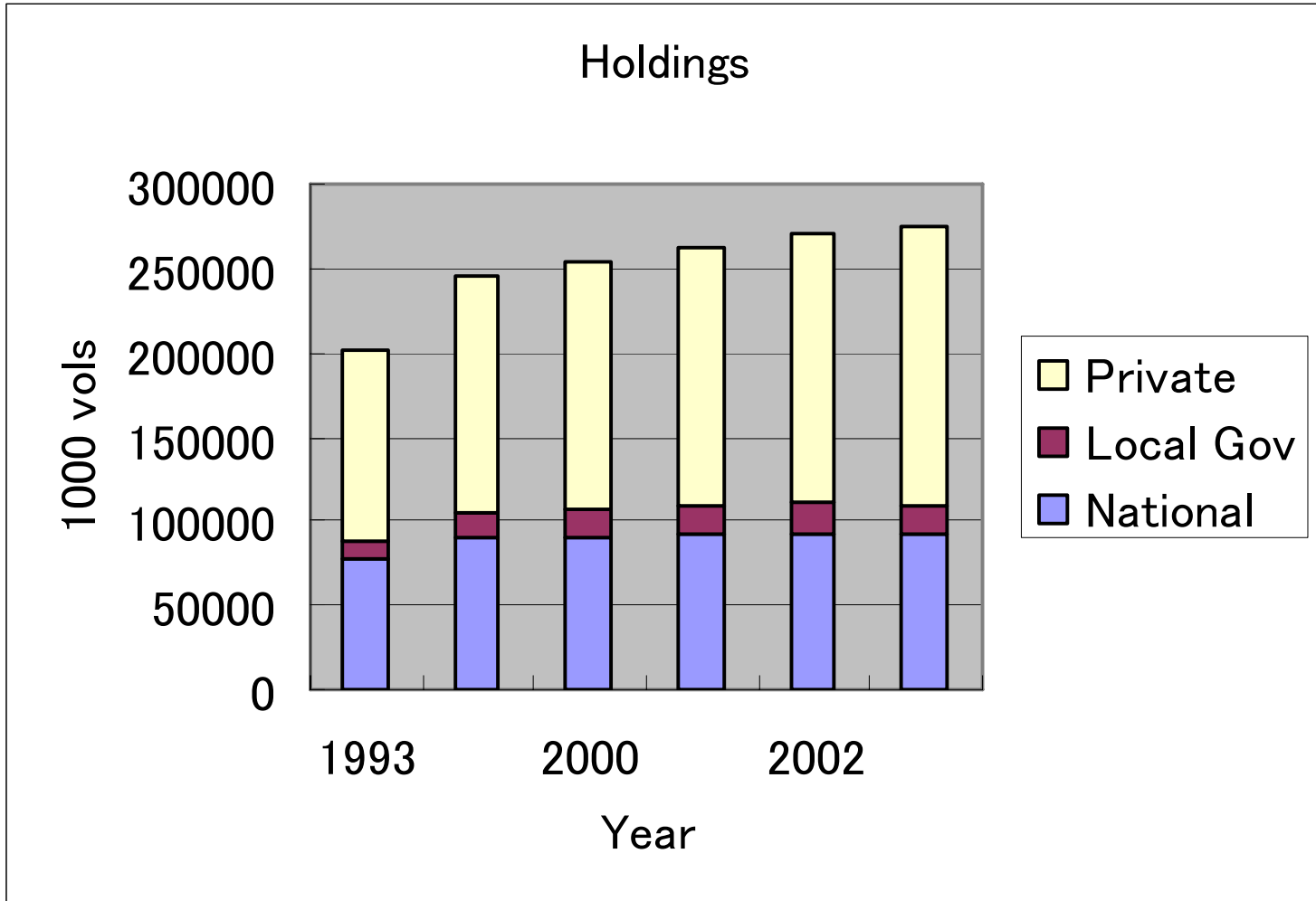
国立大学と私立大学の分業

	大学数	学部学生数	大学院生数	教員数
国立	87	459,496	146,913	60,897
公立	80	105,176	13,575	11,188
私立	542	1,941,251	83,536	86,685
計	709	2,505,923	244,024	158,770

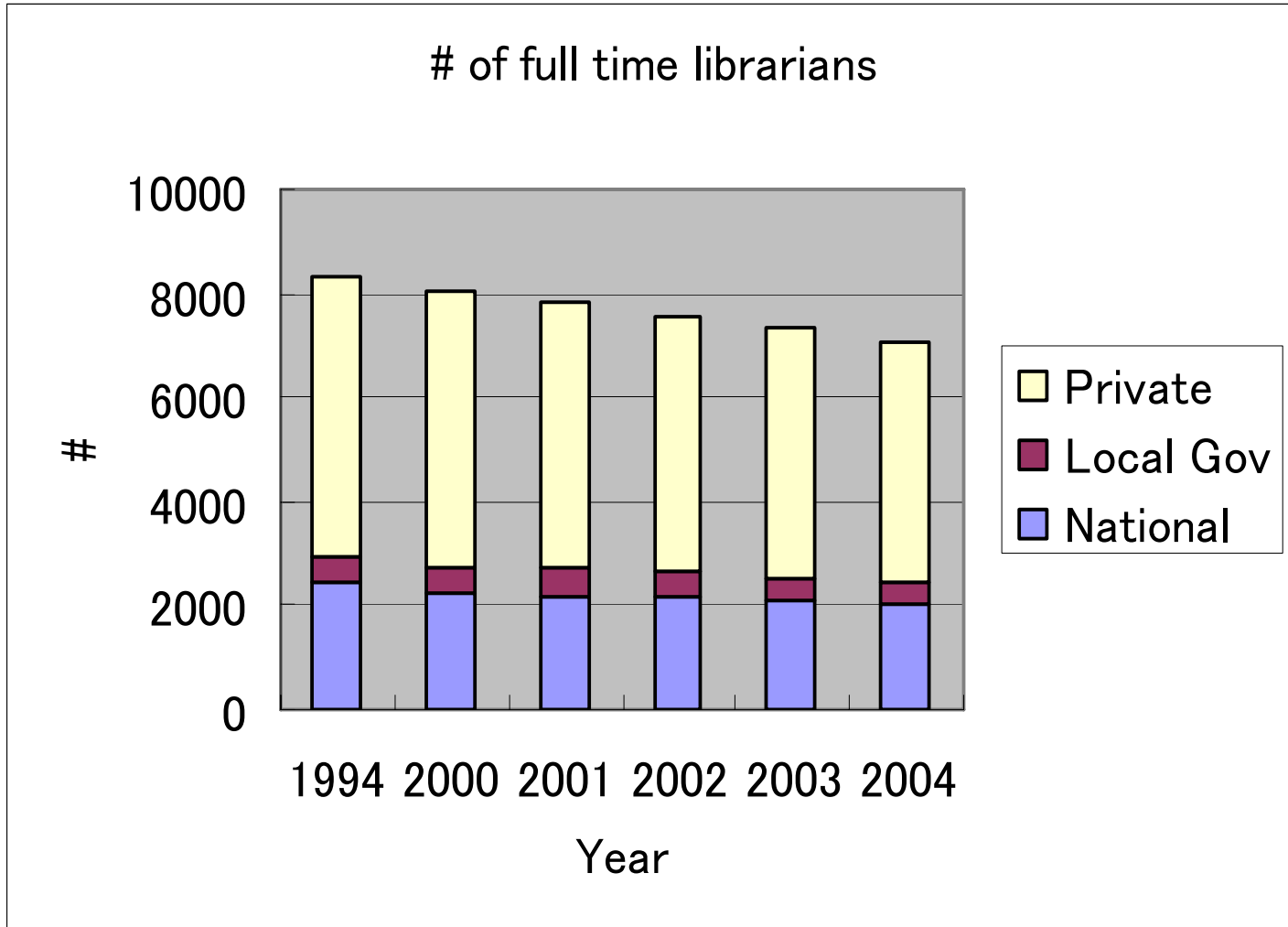
Annual funding for research in Japan (¥0.1billion = US\$1M)



Library statistics



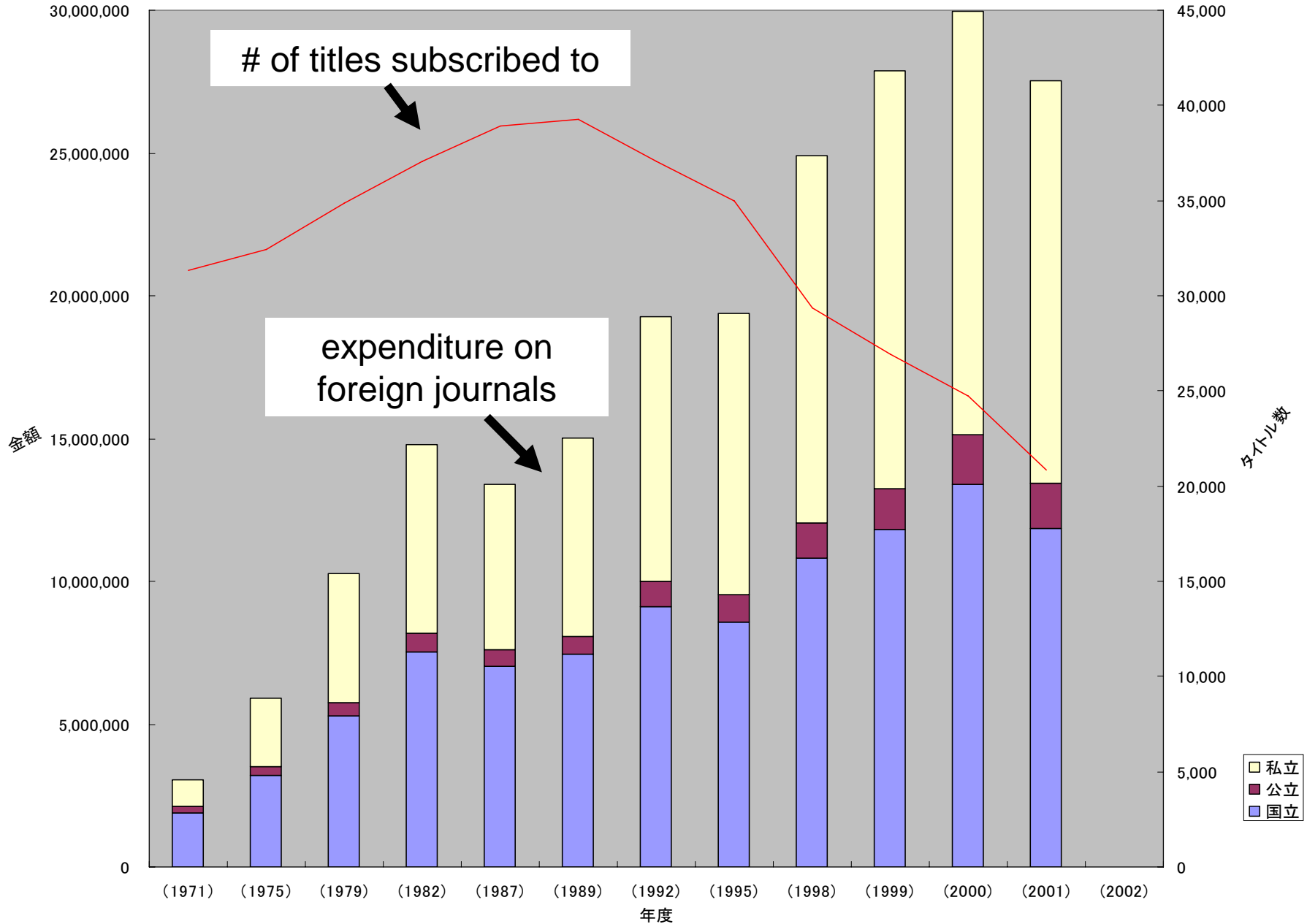
Library statistics



単位:千円

日本国内図書館の外国雑誌購入費および受入れタイトル数

但し1982年度までは和雑誌も含む



物品購入からライセンスングへ

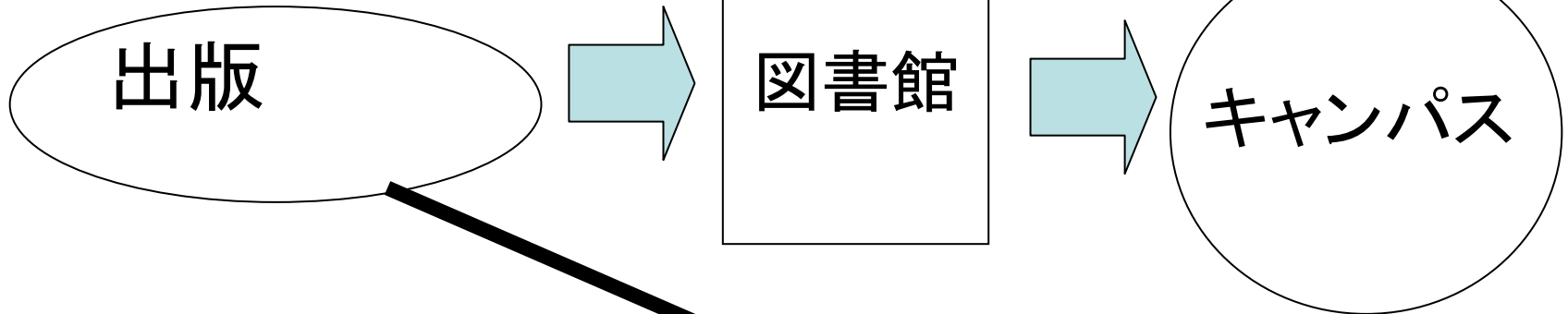
- 物品購入契約から使用許諾契約へ
 - とくに、インターネットを經由して利用される場合
 - そして、それが最も一般的(いわゆるパッケージ系電子出版物は過渡的存在)
 - さまざまに異なるビジネスモデル
 - 着メロなどのダウンロードごとの課金
 - IPレンジによるサイトライセンスング(+DDP)
 - Googleのような利用者非負担モデル
 - などなど

権利関係の変化

- 所有権から「著作権」へ
 - 「もの」に情報がつくのではなく、情報そのものを取引することができるようになる（補償金制度の終焉？）
 - 著作権（情報を作った人の権利）は私権であり、契約関係が優先される（著作権法の限界？）
 - 図書館には何の権利もない（実際、サーバからエンドユーザへ直接情報が届けられる）

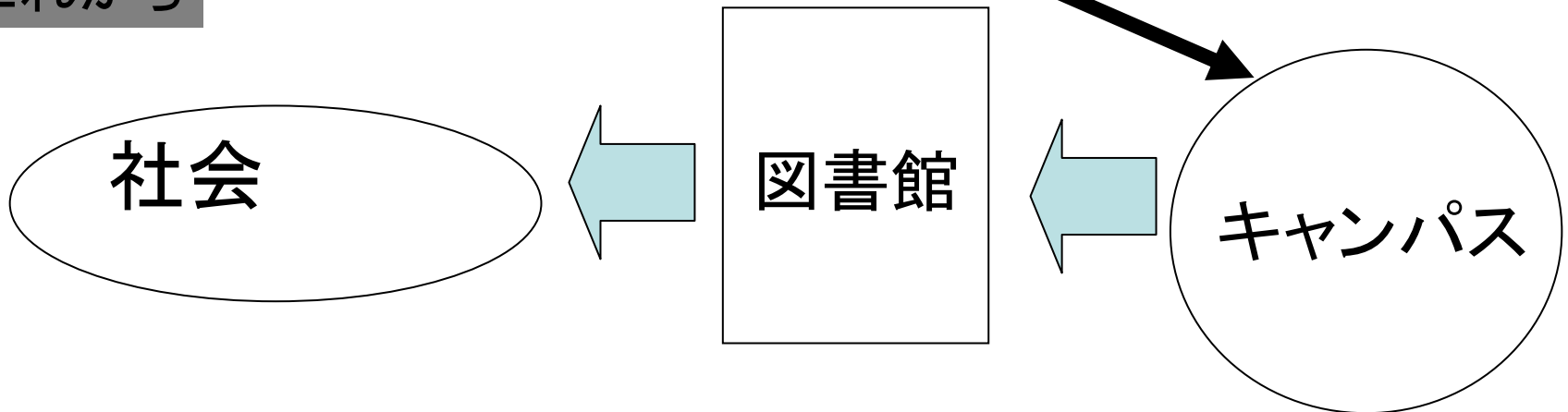
「コレクション」のベクトルの変化

これまで



デジタル化によって
直接の提供になる

これから



機関リポジトリの本質(内側からのコレクション構築)

分類・目録から 検索支援・ナビゲーションへ

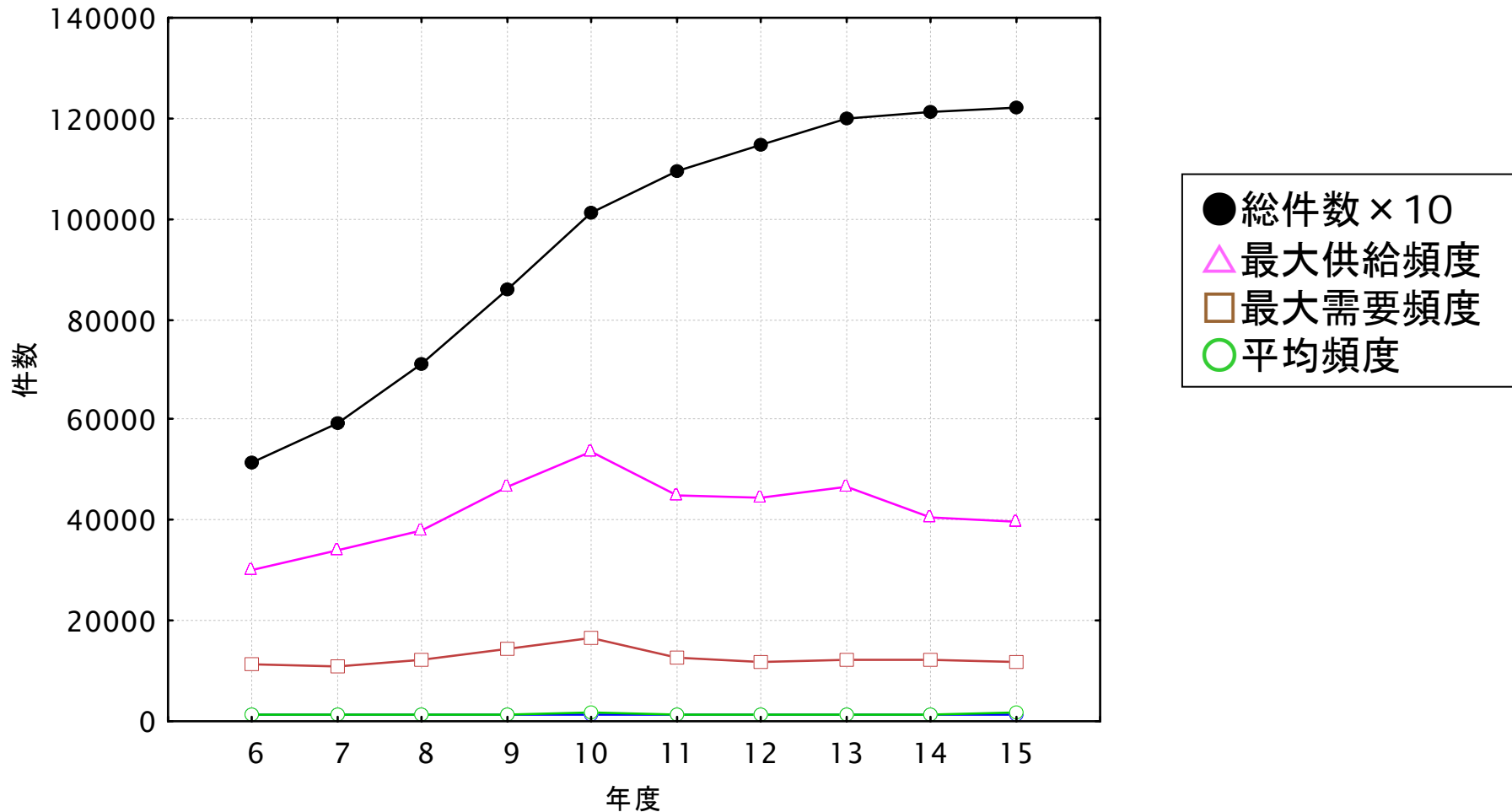
- 「何がどこにあるか」に変化が生じつつある
 - － 何： 粒度の変化（全集・タイトル・巻・号・ページからURL・DOI・<div>へ）
 - － どこ： ライセンス導入資料の実体はサーバやキャッシュにある
 - ⇒ 冊子単位に手許で管理することは不可能！
 - ⇒ 配架して、そこまで歩かせるという仕組みは崩壊
- ユーザ自身が情報本体へ直接到達
 - － 2次情報のブラックボックス化（たとえばレゾルバ）
 - － 目録共同構築の意義の変化
 - － 館ごとの独自性の希薄化

図書館間協力の変化

- 1970年代以降
 - 外国雑誌の分担収集(経費問題+スペース問題⇒外国雑誌センター館)
 - 図書館間相互貸借(ILL):とくに雑誌の複写
 - 共同の目録構築(NACISIS-CAT)
 - CAT/ILLの連携(90年代以降)
- しかし、資料のデジタル化は様子を変えた
 - ものなき「所蔵」概念の変化は既述のとおり
 - コンソーシアムの実体化。そして、保存とは何か？
 - 保存はどこかにあれば利用可能

ILLログの基本統計

総件数および最大(供給・需要)頻度



具体的問題に則して

- 電子ジャーナルの登場とそのもたらしたものの
 - － 図書館の仕事が変わった。しかし、キャンパスはもとのまま。さて、、、、
- 電子資料の保存管理
 - － 90年代電子図書館の課題
- 利用者教育
 - － 「図書館の利用法」ではだめ！

電子ジャーナルとは何だったのか

- 電子ジャーナルのサイトライセンスが機関購読の延長とみなせたので、一気に普及。しかし、大きなインパクト。
1. コンソーシアムができちゃった。プラットフォームを「買う」ためには、こっちも大型でないといけないということだが、情報そのものは図書館を物理的に経由しない
 2. そんなことを言えば、これまでの「タイトル」とは何かが必要再検討となった(QuarterlyもWeeklyも“1”タイトル?)
 3. たぶん、「論文」(article)が真の単位? 「読まれた」記録が残る(図書館には人は来ないし、記録も残らない)
 4. そして、「雑誌購読」の状況が見えなくなった。ものがないから当たり前みたいだが、、、
 5. (Lockssは別として)図書館では保存されない。もちろんこれまでだって、「確率保存」ではあったが、、、

もう利用者教育はいらない？または、 Googlization

- OPACの使い方を教えるのはもはやナンセンス。一般ユーザのほうが、もっと使いにくいデータベース検索に慣れている(OPACそのものが不要？Googleに探させれば、、、
「グーグルの情報はごみが多い」は事実だが、大事なものが落ちるよりははるかによい)
- サブジェクト・ゲートウェイは専門家のほうが得意なはず
- データベース利用はそれぞれ特化した指導者がやればよい

電子資料管理(ERM)は大事

- でも、図書館の仕事？ は別にして、
 - ライセンス導入資料・自館電子化資料・(なぜかそこにある)ボーンデジタル資料を「管理」しないといけない(ただし、ライセンス導入資料は手許に実体はない)じゃ、「管理」って？ 物品管理ではない！
 - おまけに、紙も残る
 - となると、管理というのは、自館資料をユーザにどのように見せるかということに尽きる。つまり、大事にとっておくことは管理ではない

となると、保存とは？

- 印刷物の時代には、ものとしてなくならないようにしておくことが「保存」
- 図書館に「もの」がない以上、「保存」といってもなにだろうか？
- これからは、「保存」は社会全体の責任となる
 - 各種アーカイブの構築
- 一方で、ただの「保存」(=あり続けるだけ)は、保存たり得ない。使えずして保存に意味があるか？

では、大学図書館の残された役割とは？

- 基本的には大学そのものになること
 - 大学は学ぶ場所であり、学ぶのは学生（教師と資料とは同レベルの存在）
 - とはいうものの、
 - 大学における研究成果を着実に蓄積・公開する役割こそが新しい役割
 - 収集のベクトルの変化とみてもよい
 - 非均質な資料を対象とするERMの道と考えてもよい
 - 図書館が出版者になると考えてもよい
- そのどれもが、デジタル化によってもらされたもの！